

大曲の遺跡Ⅱ

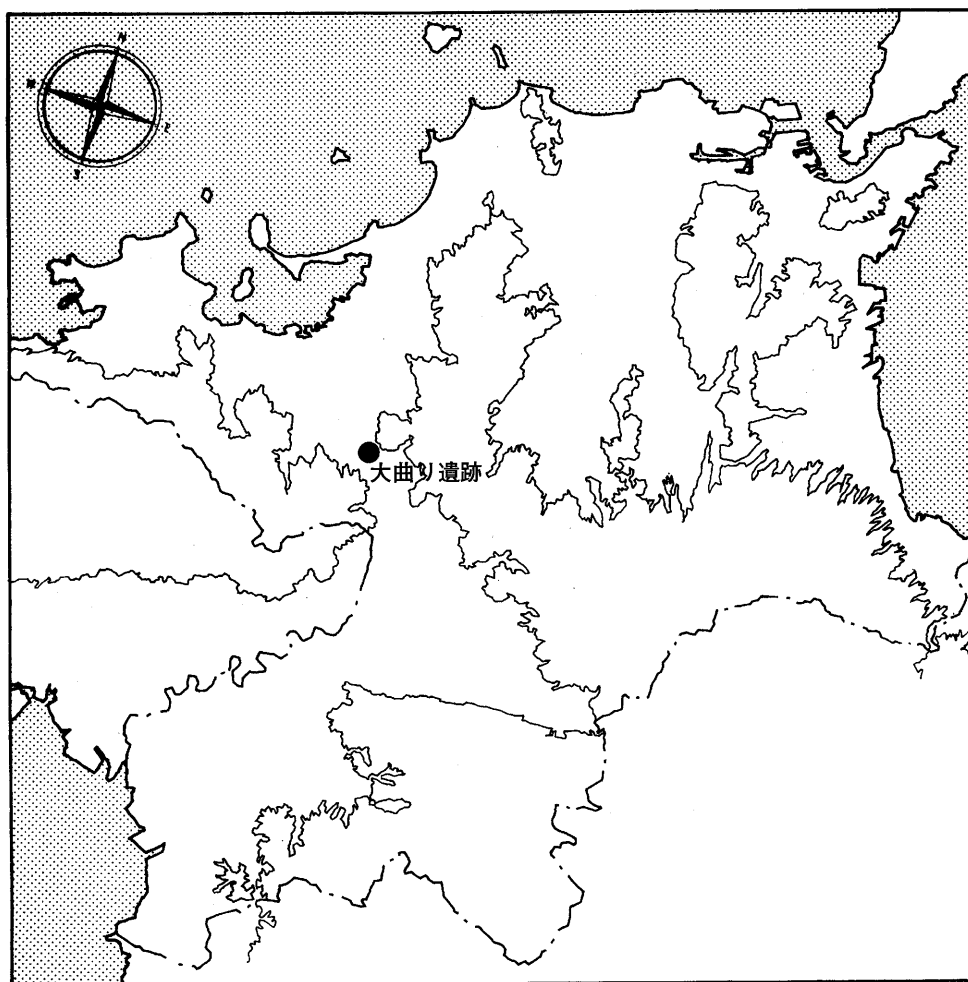
筑紫野市針摺所在遺跡調査
筑紫野市文化財調査報告書

第 49 集

2000

筑紫野市教育委員会

おお まが
大 曲 り 遺 跡 Ⅱ



例 言

1. 本書は、福岡県筑紫野市針摺570-3 外に所在する大曲り遺跡の発掘調査の記録である。
2. 大曲り遺跡の発掘調査は、国道3号線福岡南バイパス建設事業に関連して調査がなされているため今回の調査地点は大曲り遺跡Ⅱとした。
3. 調査は、(有限会社)タナカ住研の委託を受けて筑紫野市教育委員会が実施し、調査期間中は、(有)タナカ住研様より多大なる御協力・御理解をいただきました。
4. 現地での実測・写真撮影は渡邊和子が行なった。
5. 出土遺物の実測は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託、一部を平嶋琢巳・渡邊が行ない、渡邊が製図、遺物写真はフォトハウスおかに委託し撮影した。
6. 遺物の復元ならびに本書作成にあたっての整理作業には、浅谷芳江・加藤美智子・北野正子・高木保子・松尾敦子・百田愛子・山内妙子が従事した。
7. 本書掲載の図の方位は座標記載のものはG・N(座標北)で、他はM・N(磁北)を使用した。
8. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
9. 題字は、筑紫野市国保・年金課主査、平嶋陽子氏による。
10. 本書の執筆・編集は渡邊が行なった。

本文目次

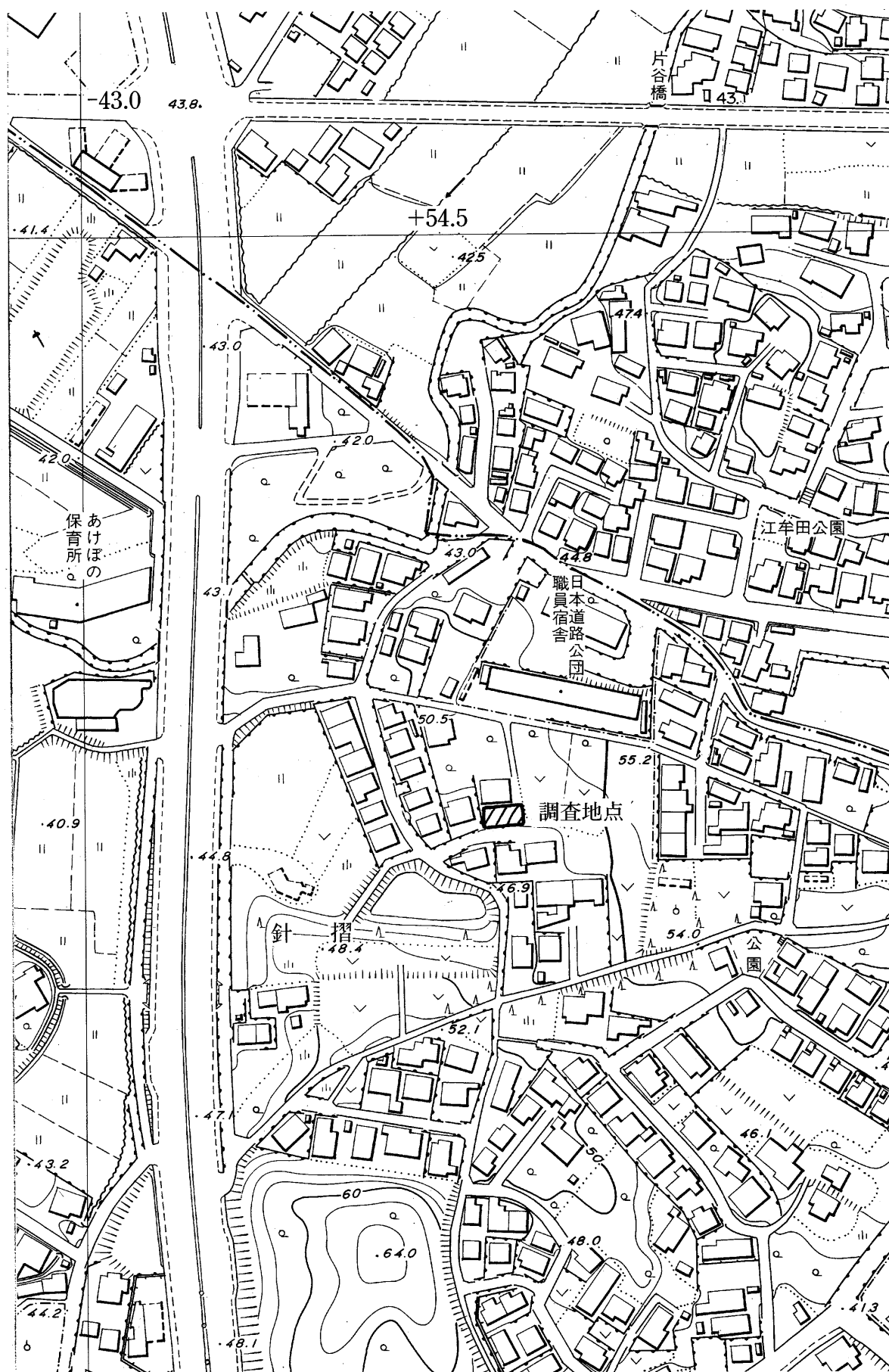
	頁
I. 調査に至る経過	3
II. 位置と環境	3
III. 調査の概要	5
1. 住居跡	5
2. 窯状遺構	7
3. 出土遺物	10
4. その他の遺構	14
IV. まとめ	16~18

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	1
Fig. 2 調査地点位置図 (S=1/2,500)	2
Fig. 3 遺構配置図 (S=1/100)	4
Fig. 4 1・2号住居跡実測図 (S=1/60)	6
Fig. 5 南壁土層図 (S=1/40)	7
Fig. 6 窯状遺構実測図 (S=1/40)	折り込み
Fig. 7 出土遺物実測図-1 (S=1/3・1/4)	11
Fig. 8 出土遺物実測図-2 (S=1/4)	13
Fig. 9 その他の出土遺物実測図 (S=1/3)	14
Fig. 10 古墳時代の集落および古墳群位置図 (S=1/5,000)	16
第1表 出土遺物一覧表	15

PL目次

PL. 1 遺跡全景	4
PL. 2 1・2号住居跡	6
PL. 3 土層写真	8
PL. 4 窯状遺構	9
PL. 5 遺物写真-1	12
PL. 6 遺物写真-2	13
PL. 7 遺物写真	14



I. 調査に至る経過

平成7年3月に申請者、(有)タナカ住研、代表取締役・田中賢一氏より、筑紫野市大字針摺570番地3外における文化財の有無についての照会が提出され、試掘調査による確認が必要であるとの通知を行なう。同年、同月に試掘調査を実施し、開発予定地の一部に遺跡が所在するのを確認した。

この後文化財保護法第57条の2項を提出し、文化庁より工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知があり申請者に伝えた。これをうけた田中氏と協議を重ねたが、工事の工程上、夏までに調査を完了させてほしいとの要望もあって、当該地の発掘調査を緊急に実施することとなった。

平成7年6月14日付で、埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、6月16日より発掘調査を開始し、現地での発掘作業を7月1日をもって完了させた。

調査組織

総括	筑紫野市教育委員会	教育長	永渕正敏
庶務	〃	教育部長（前任）	永田晋一
		〃（現任）	岡部隆充
		社会教育課 課長（前任）	岡部隆充
		〃 〃（現任）	田中哲也
		〃 課長補佐兼係長	古賀幸信
		〃 係長（前任）	森実秀美
事前審査		技師	草場啓一
発掘調査・整理報告		〃	渡邊和子

II. 位置と環境 (Fig.1・2)

調査地点は筑紫野市大字針摺570-3番地に所在。

遺跡の位置する丘陵部は、福岡平野と筑後平野をつなぐ、分水嶺をなす二日市低地帯の東側の低丘陵部に位置する。この低丘陵群は、三郡山塊より派生した高雄山（標高151.5m）より延びる標高50mほどの独立丘陵が狭い谷で接しながら連なって所在する。このそれぞれの独立丘陵上には、中山博士の踏査で多くの遺跡が確認されていたが、早くから開発がされ今は一面宅地となって、ほとんどの遺跡は削平もしくは、壊滅状態になっている。

今回の調査地点は、この丘陵の一つの大曲り遺跡の範囲で、狭い谷を挟んだ南側に弥生時代前期から中期の集落跡の野黒坂遺跡が所在する。戦後の開墾によって、遺跡は削平されているものと考えられていたが、試掘の結果、丘陵縁辺部付近には、まだ遺構が所在することが分った。

福岡南バイパス関係の発掘調査（昭和46年）において、古墳時代後期の集落跡の所在が、確認され東側の方へ続く可能性が示唆されていた。今回の調査が、これを裏付ける結果となり、さらに東側に所在する団地は、本来の地形を残しつつ、造成がなされていると予測でき団地内の家屋の建替時に、できる限り試掘を実施することとして、内部の事前審査担当と協議をおこなった。

周辺域の削平されたとと思われる遺跡については、今後開発の申請がなされた折には、注意し中山博士の報告にある遺跡とのつながり、もしくは関連を明確にしていくことが望しいものであると考えられる。

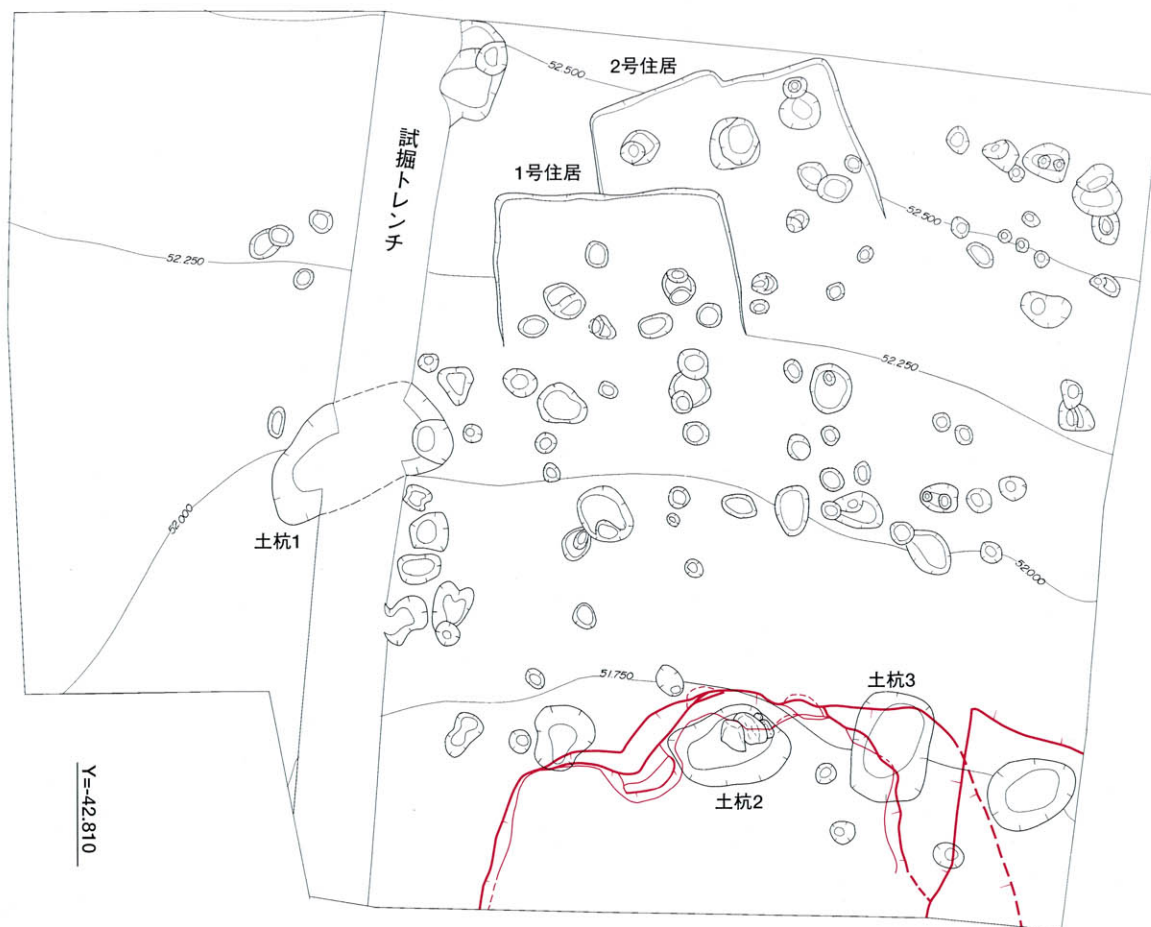


Fig.3 遺構配置図 (S=1/100)



PL.1 遺跡全景

Ⅲ．調査の概要

調査は、開発対象面積2,520m²のうち、遺構の遺存した南西側の約405m²を調査対象区とした。

試掘調査時の所見によれば、遺構は連続せず、地山面に熱変化した箇所が確認された事と須恵器の大甕の破片が出土した範囲を調査区として協議後設定されていた。

機械搬入後、試掘トレンチ部分を確認しながら、南側道路付近までを剥土した。トレンチ西側では、遺構の残りは悪く、柱穴が僅かに検出されただけであった。調査区北側中央部で住居跡が確認され、穏やかな斜面が道路付近へと続き、現状道路となっている所は、戦後の開墾時に小谷を埋めて平坦面としたことが理解された。中央付近には柱穴以外の遺構は、検出されなかった。

このことから遺跡の遺存する範囲は、調査区の北側から東側へと延びる可能性があったが、調査地点を拡張することや変更することは、できず設定した範囲で収めた。

ただ南側の谷部への落ち際を若干掘り下げた所、被熱や熱変化した埋土の堆積が確認されたことから道路との境界ギリギリまで拡張し掘り下げた所、壁面が熱変化した層の堆積や、灰の堆積が認められ、遺物の出土もあったことから窯の所在を想定できたが、道路下に遺構の広がりがあることから、これ以上の拡張は無理と判断した。このため本体自体の全容は、明確に捉えることは、できず、ここでは窯状遺構として扱った。

検出された遺構は、住居跡2軒、土坑3基、柱穴94である。

柱穴の一部には掘方として、しっかりしたものも見受けられたが建物跡として、まとまりのあるものは検出できなかった。

1．住居跡（Fig. 4，PL. 2）

調査区北側中央部、標高52～53mに立地し、切り合って2軒の住居跡を検出。遺構の切り合いからは1号住居跡が2号住居跡より新しくなる。

1号住居跡は、主軸N—6°—Wを測り、プランが検出できたのは、北側および東西の壁の一部で北壁は一辺3m、壁高20cmを測る。床面には貼床は認められないが、踏みしまりは顕著である。

遺存する壁面には、カマドを取り付けた痕跡などはなく、現状では、カマドが付設されていたか否かは不明である。また現存の床面上には炉があった痕跡もない。柱穴は遺存する壁面から0.8～1mの位置にあるものP-1～4が主柱穴であったと考えられる。これらから推定すると南北方向が、若干長い長方形プランを呈していたことが窺える。

2号住居跡は、1号住居跡に切られ、1号と同様に壁面には、現状ではカマドの付設された痕跡はなく、床面にも炉跡らしいものは確認されなかった。床面の貼床は存在しないが、やはり踏みしまりが、確認できた。柱穴は、P-5～8を4本柱として想定したが、柱穴の配置が、やや歪つとなる。

1号住居跡の主柱穴は、中央に配置されるが、2号においては、ややコーナーに近い壁付近に配置されている。遺存する壁は、1号と同様に北壁と東・西壁の一部である。壁の高さは、北壁の残りの良い所で、5cm前後と総体的に遺存状況は悪い。また北壁は、東西のコーナー部を結ぶと、平面プランが一直線上にはならず、中央付近で中ぶくらみをする、この付近に別の遺構が所在した可能性も考えられたため、かなり精査してプランの検出に努めたが、別の遺構の所在は確認できず、やはり、直線の壁にはならない。

1・2号ともに時期決定できる遺物の出土は、ほとんどなく、明確な時期設定はできない。

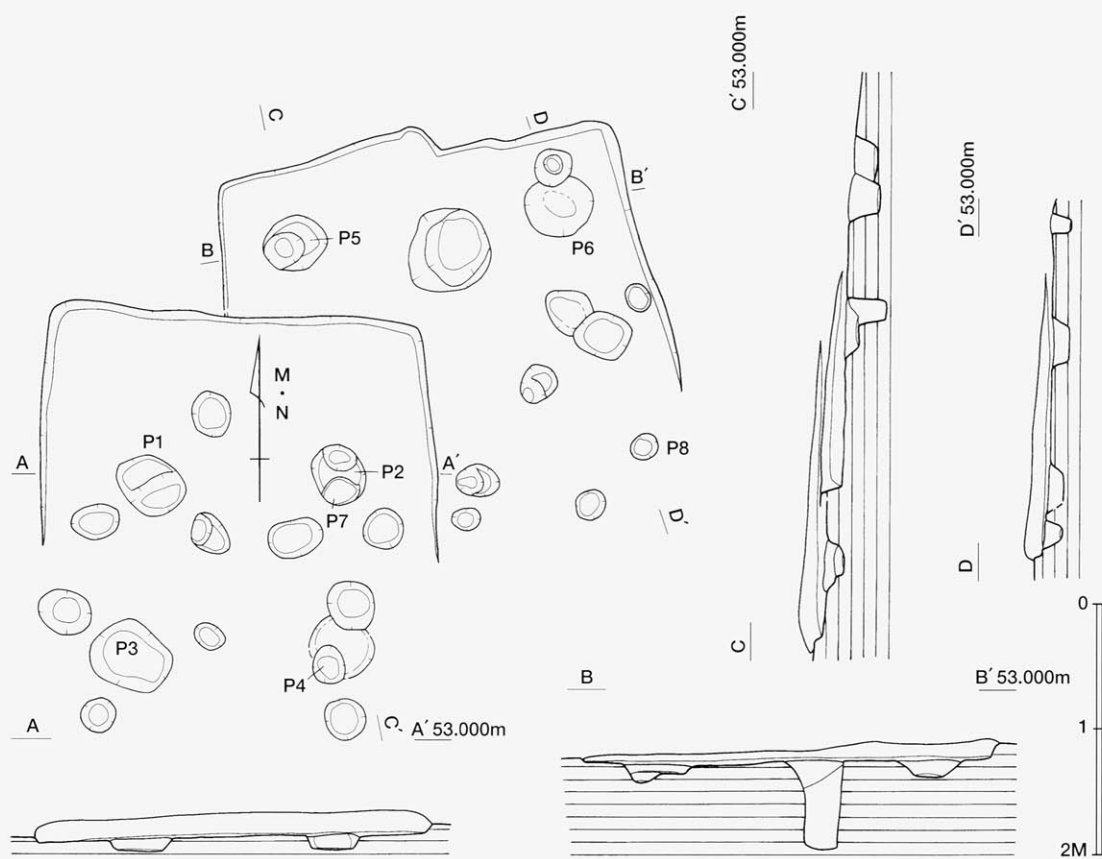
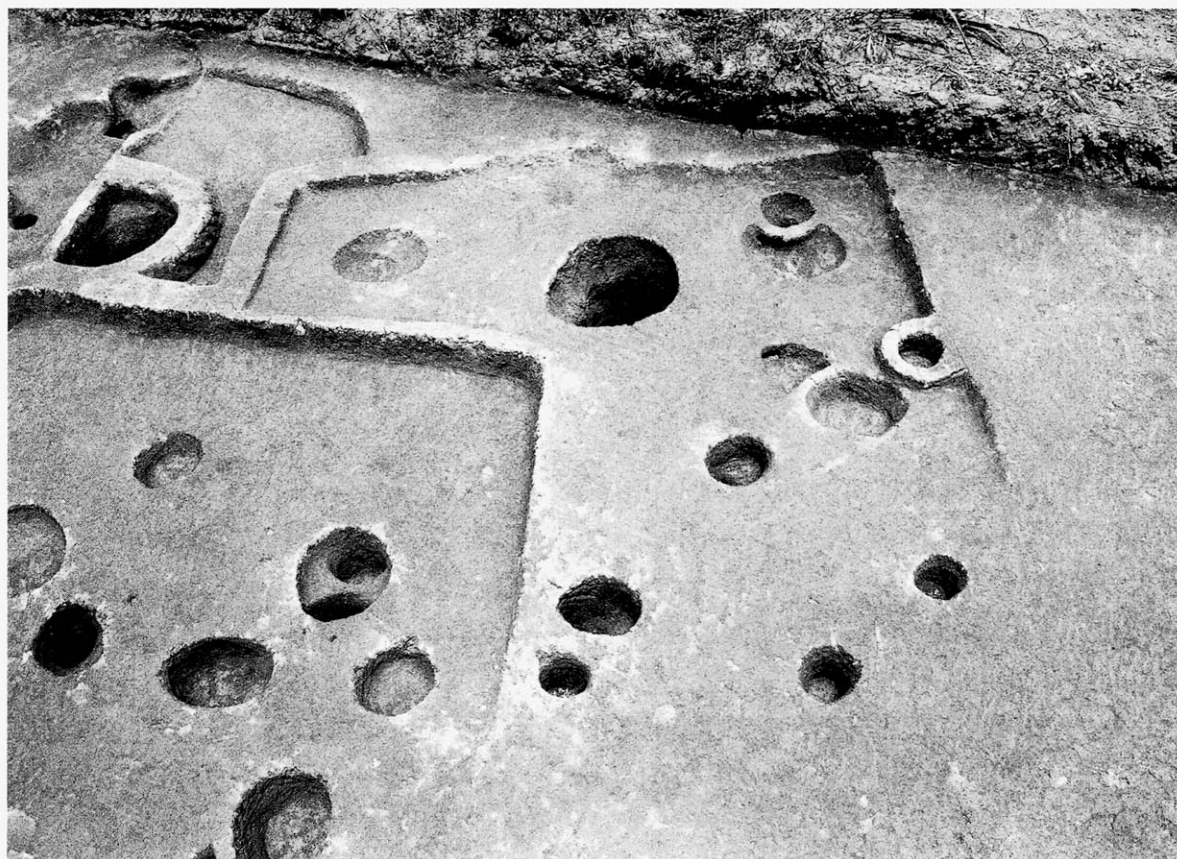


Fig.4 1・2号住居跡実測図 (S=1/60)



PL.2 1・2号住居跡

2. 窯状遺構 (Fig. 5・6, PL. 3・4)

調査区の南端、現在の道路際で検出された。谷部に盛土された表土層を剥土すると、新しい時期の土坑や柱穴が検出され、それらの遺構の下に構築されている。

検出当初は、旧地形を確認するため掘り下げたが、部分的に被熱を受けた壁が所在することに気づき、調査区を道路ギリギリの所まで拡張し掘り下げた。

ただ道路直下に延びることもあって、遺構本体の全容を確認するには至らなかった。

Fig. 5の南壁の土層図を見ると、層序は、①表土、②客土(戦後の開墾時の谷への埋土)、⑤旧地表、⑧～⑩地山(多少のよごれや、やや被熱した焼土)、⑪被熱した壁や天井部、⑬灰層、⑭床面上の堆積土に概ね分けられる。層序から判別されるのは、現G L面の北側から土層図作成の南壁までの旧地表面は、40～70cmを測り、道路中心部へと下がっていくことが理解でき、その旧地表面の下には、若干の被熱した地山や窯状の天井部もしくは、壁の落下した堆積⑪があり、その下には、炭まじりの灰層も認められる。またFig. 6の平面図のアミ部分の壁は、明らかに熱を受けた壁の箇所であり、窯状遺構と推測した根拠でもある。ただ壁の残りは悪い。現存部での縦断面図C～C'ラインの床面は、平坦で僅かだが熱変化している。また壁面の中央部付近に底面40～60cmの段状のピット様のものが、ある。これらは、深さや大きさは、統一化されていないが、壁面・底面ともに被熱を受けた痕跡を共通点として見いだせる。また本体の北壁の被熱した壁より、中ぶくらみして掘りこまれていることを考慮しても、この本体に伴うものであることに共通するが、類似のものの検出例は、周辺域の事例にもなく、用途あるいは性格などは不明である。

横断面のA～A'ラインの壁は、床面より緩やかに外側に開きながら立ちあがる。また床面は、壁から南側へ徐々に傾斜をもって下がる。横断B～B'ラインでは、床面は平坦部を形成し、それから徐々に傾斜をもって下がっていく。このラインの壁は、A～A'ライン同様に立ちあがるが、Aラインから比較すると壁の器高は高い。これは前述のピット様のものの存在に起因するが、このピット様の段は非常に興味深いものである。

これらの所見を総合して考えると、窯の形状は、牛頸窯跡群M-2区(笹原窯跡群)の70号窯に類似点を見い出すことができる。しかし、この70号窯は炭窯として報告しており、今回の調査区において検出した窯内部の埋土中からは灰層の下に層があり、床面上に灰層が充填していた訳ではなく炭窯とは考え難い。窯については、まとめて述べてみたい。

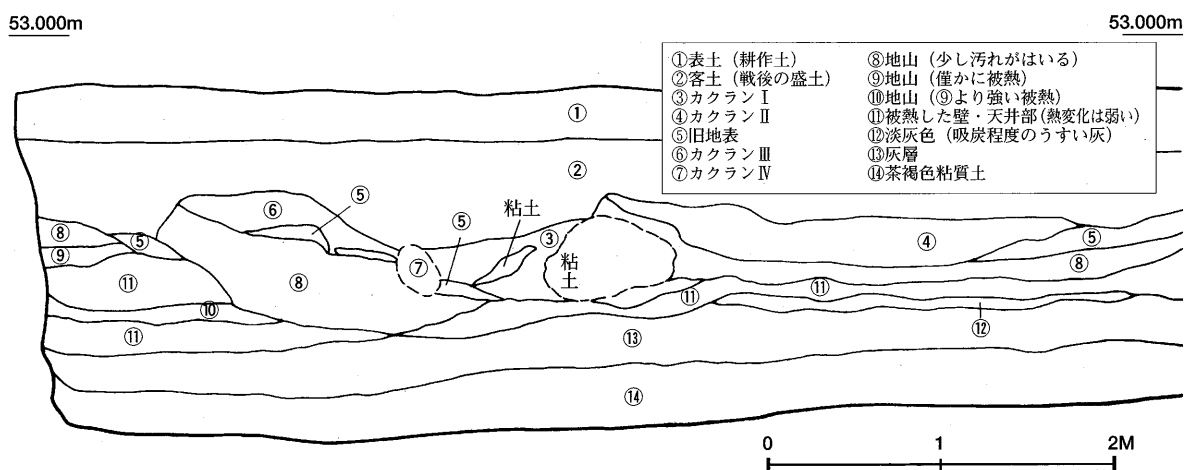


Fig.5 南壁土層図 (S=1/40)



PL.3 土層写真

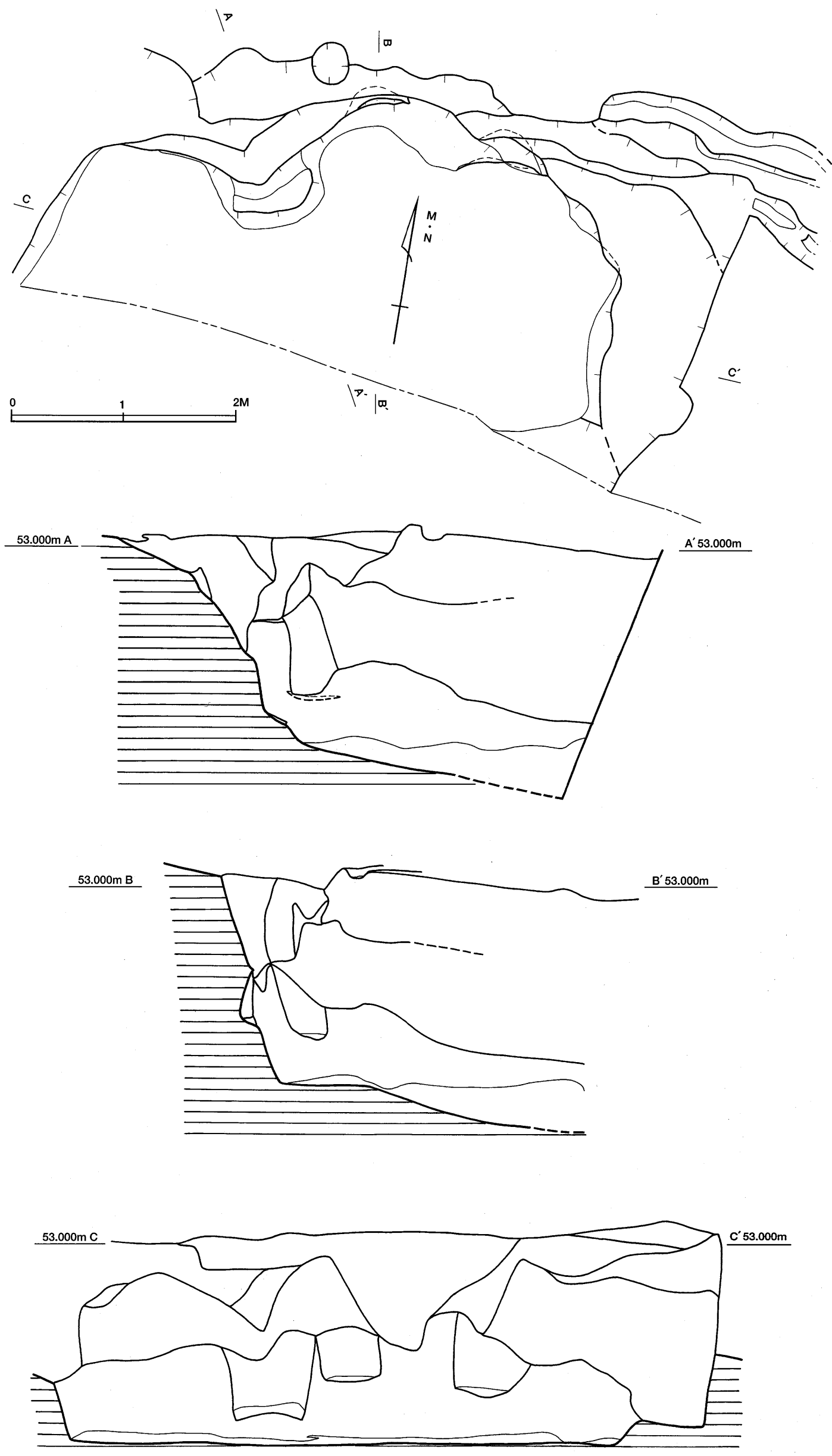


Fig.6 窯状遺構実測図 (S=1/40)



PL.4 窯状遺構

3. 出土遺物 (Fig. 7・8, PL. 5・6)

窯状遺構の埋土中、⑬灰層や⑭茶褐色粘質土から、須恵器(Fig. 7)のほとんどが出土した。また Fig. 8 掲載の土師器は、カクラン層や須恵器と同一場所から出土したものに分られる。

須恵器については、焼成の不良なものや歪つなものが、半数を占める。

坏蓋・蓋(1~10) 1は、口径12.4cm、器高2.5cmを測る。胎土には少量の細砂粒を含んでいて、焼成は普通であるが、歪つなものである。2・4・5・7~9は、つまみがあって、かえりもあるもので、口径は14.3~15cmの範囲となるが、2のみ13.3cmを測る。焼成は、5・7・9が不良で、ほかは普通や良好となる。3・6は、つまみがあって、かえりがあったものと思われるが、天井付近しか出土していない。また10は、かえり部付近しか出土していないが、やはり、つまみはあったものと思われて、復元口径は、18.8cmと大きめで、総体的に土器の器表は摩耗が著しい。8は、1と同様にゆがみが著しいものである。

坏蓋・身(11・12~21・23) 11は、かえりがあって口径11.9cm、器高3.05cmを測り、焼成は不良で摩耗が著しい。12~14・19・23は各々形態が異なる。復元口径は、12~16cmを測り、口唇部は丸みをもつものと口縁部が外反するものとに分られる。底面はヘラ切りされ、その後ナデで仕上げられているが、14のみ板状圧痕をウッスラと残し、13は、歪つである。15~18・20・21は高台のつくもので、高台がやや高く、大きめでハの字形に開くもの(15~17)と高台は、総体的に底端部より、やや内側につくなどの特長が見られる。復元口径は、12.5~14.2cmと器高4.4~4.9cmの範囲に収まるが、16のみ口径15cm、器高7.6cmとやや大きめとなる。18のみ焼成が不良で、器表の摩耗が著しい。また底部外面には、ヘラ記号のあるもの(15・17・21)となる。

壺(24・26・29) 24は頸部付近の1/4を残す破片で、内外ともにヨコナデで仕上げられる。焼成不良の26は、ほぼ完形である。口縁部は直に近く立ち上り頸部から胴部までカキ目を施す。体部の下半部はケズリ後ヨコナデで仕上げ。29は長頸壺の頸部で中央付近に二条の沈線を巡らす。

盤(25) 底面が丸みをもつもので、土器自体は、非常に歪つである。

無蓋高坏(27) 坏部は浅く、口縁部は、僅かに外側に屈曲させ端部を丸く収める。坏の体部は、ケズリによって仕上げ。脚部も短く、ハの字形に開いている。

鉢(28) 口縁部は、内弯し、端部はやや直立する。体部は丸みをもち、底面~体部下位は、ケズリによって仕上げられる。

甕(30~42) 30は胴部の破片。外面の頸部へ胴部下位までは、擬格子のタタキの後にカキ目を施し、体部下位は格子状のタタキによる仕上げである。31は、復元口径14cm、器高13.6cmを測る。器表は摩耗が著しく、調整は不明の部分が多い。31~42は、焼成は普通であるが、器表の摩耗しているものがある(32・37・39)。また口縁部は、やや外反するもの(31~35)、口縁部が、くの字に外反する(36)ものや、口縁部は外反し、口縁端部を、さらに胴部の方へ折り曲げたもの(40)、端部を水平にしたもの(41)などに分けられる。38だけが、口径20.8~21.8cm、胴部最下径26.7cmと測ることができる。いずれも内面は、ケズリ、外面はハケ目による仕上げが施される。

盤(43) 体部は、丸みをもち底部との境はゆるい曲線をえがく。また底部の器壁は体部に比較して薄い。内外ともに器表の摩耗があって、調整は不明瞭である。焼成は普通。

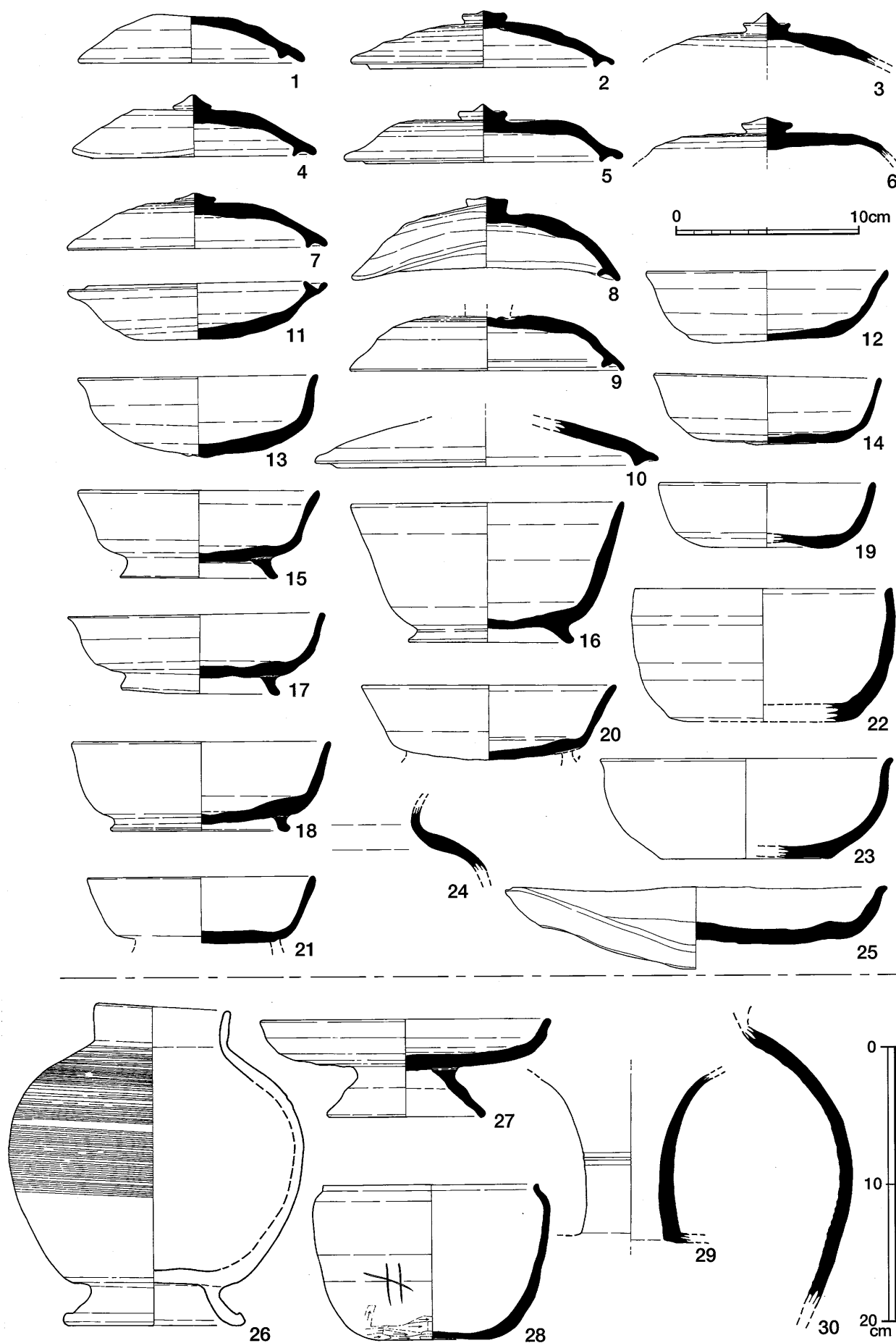


Fig.7 出土遺物実測図-1 (S=1/3・1/4)



Fig.7-1

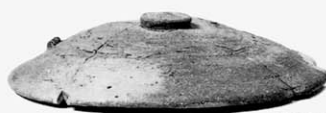


Fig.7-2



Fig.7-3



Fig.7-4



Fig.7-5



Fig.7-6

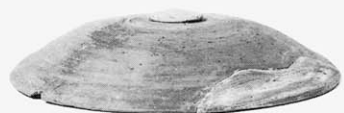


Fig.7-7



Fig.7-8



Fig.7-12



Fig.7-13



Fig.7-9



Fig.7-14



Fig.7-15



Fig.7-10



Fig.7-19



Fig.7-17



Fig.7-16



Fig.7-22



Fig.7-18

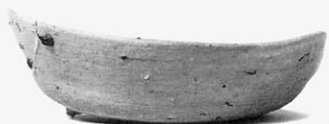


Fig.7-20



Fig.7-23



Fig.7-21

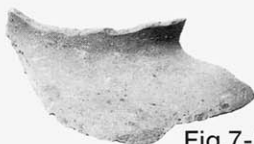


Fig.7-24



Fig.7-27



Fig.7-25



Fig.7-26



Fig.7-28



Fig.7-29



Fig.7-30

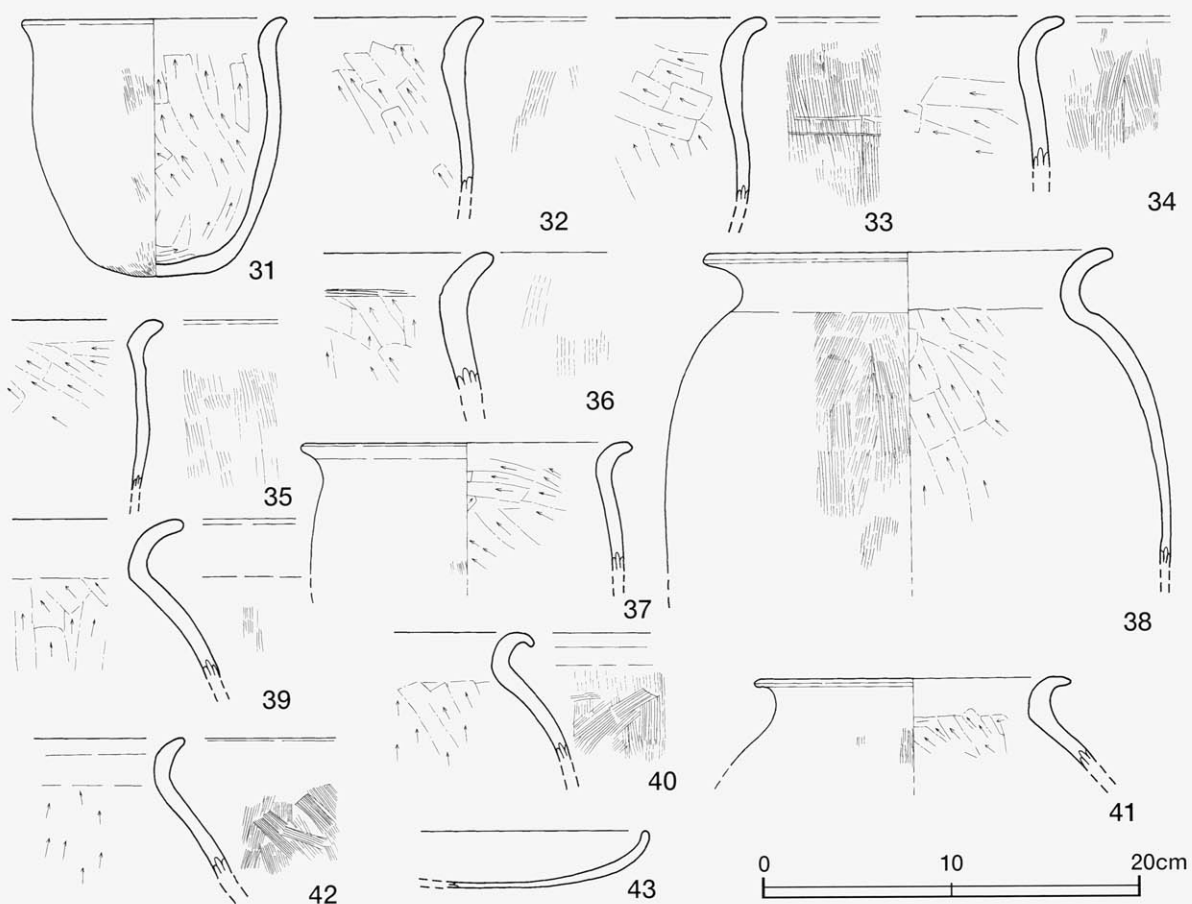
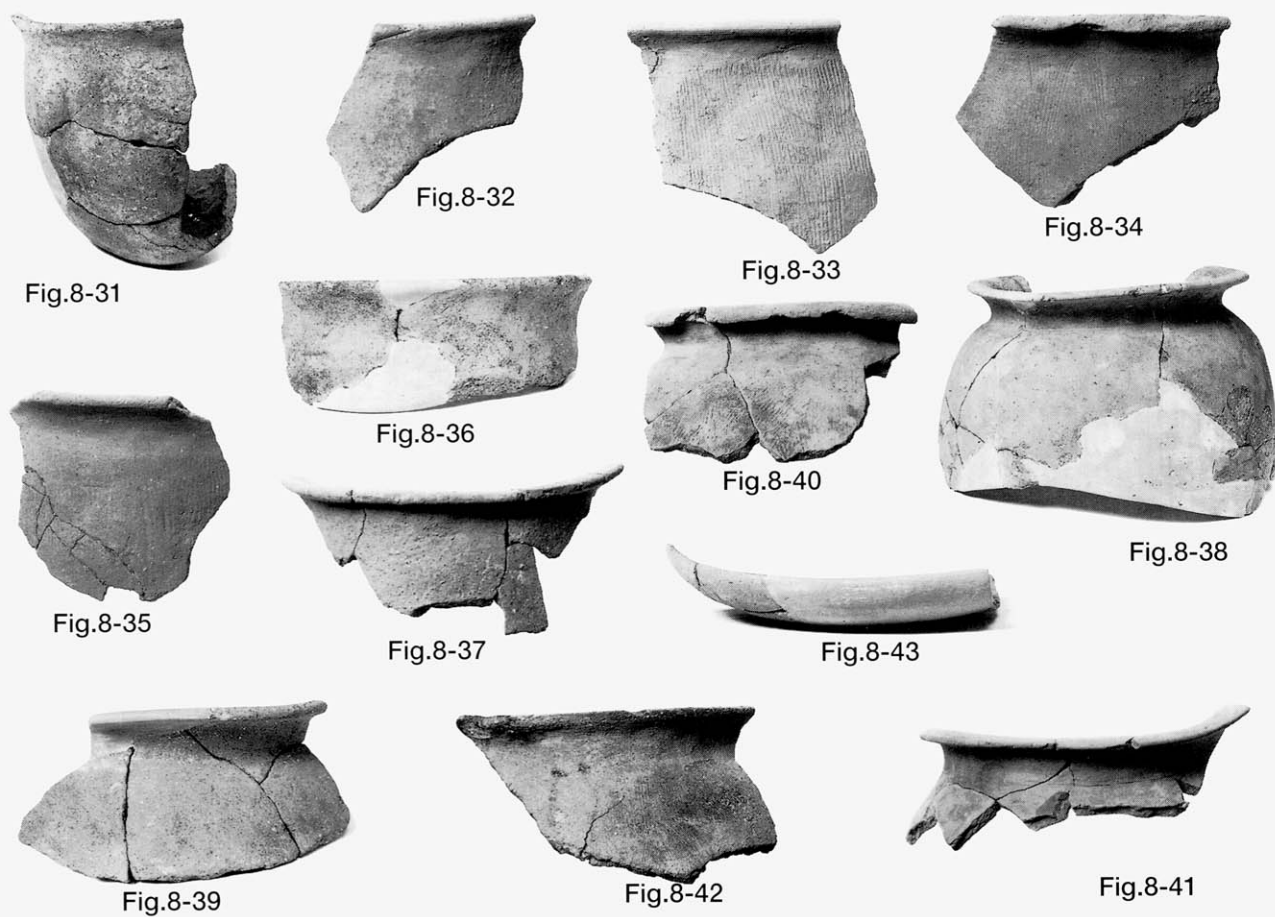


Fig.8 出土遺物実測図-2 (S=1/4)



PL.6 遺物写真-2

4. その他の遺構 (Fig. 3, PL. 1)

概要でも述べたように、住居跡以外の遺構として3基の土坑があげられる。

土坑1 試掘のトレンチにより中央部を失ない、長軸2.4m、短軸0.6~1.1mの平面、不整形な形状を呈す。壁は、比較的緩やかに斜めに立ち上がり、残りの良い所で10cm程度である。床面は平坦を呈し、東南のコーナー部にピットがあるが、深さは、さほどなく、遺物の出土はない。

土坑2 窯状遺構すなわち谷部の積み土の中にあって、大きなもので40~50cm、小さなもので、15cm前後のものが集石されている。このことは、調査区周辺に古墳あるいは、石棺が存在した可能性も考えられるが、推測の域をでない。

土坑3 土坑2に近接した所で検出された。長軸1.5m、短軸1mの隅丸長方形プランを呈す。

これも土坑2と同様に谷部の積み土面に切りこまれている。

出土遺物 (Fig. 9, 44~46) 遺構に伴うものは、細片で図示できるものはない。谷部の積み土中から出土したものを掲載する。図示できなかったが、甕(45)と同様な口縁部片など多数出土している。このことからこの一帯に多数の遺構(住居跡など)が、所在していた可能性は否定できない。

坏(44) 歪つな坏の破片。焼成は普通で、器高7cmを測る。口縁部の内外面はヨコナデで仕上げられ、底部内外面はナデが施される。また口縁外面には、自然釉が付着する。

甕(45) 復元口径14.2cm、残存高6.9cmを測る。口縁部の内外は、ヨコナデで仕上げ、頸部~胴部の内面はケズリを施している。外面は、器表が摩耗しているため不鮮明だが、ハケ目を施して仕上っていると思われる。

甗(46) 残存高20.05cmを測る。砂粒を含んでいて、焼成は良好である。把手部分は、指ナデの仕上げで、本体と接合している。口縁部は、ヨコナデ、頸部から胴部下位は、ハケ目後ナデによって仕上げられている。内面の胴部はケズリ、胴部下位はケズリ後ナデを施している。



Fig.9-44



Fig.9-45



Fig.9-46

PL.7 遺物写真

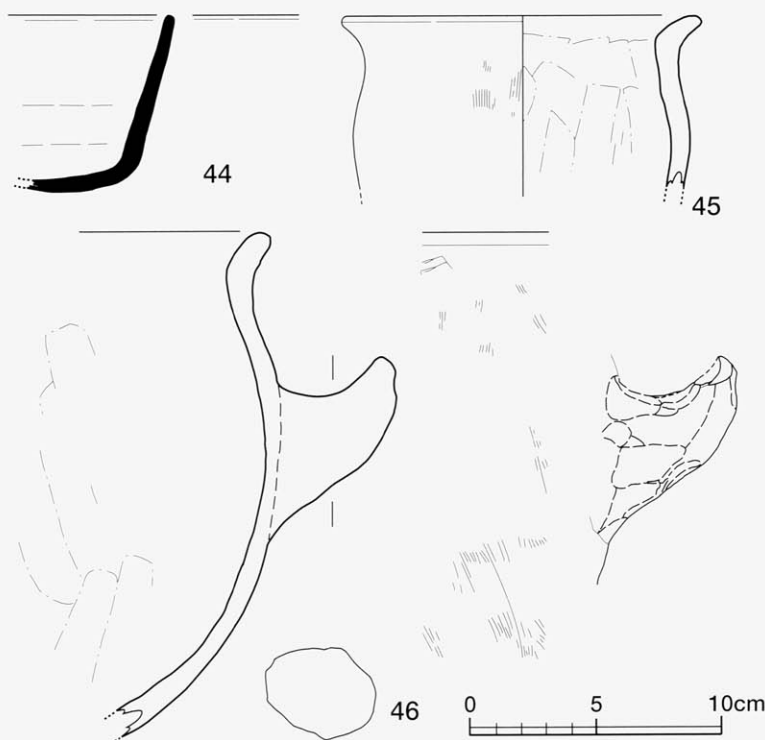
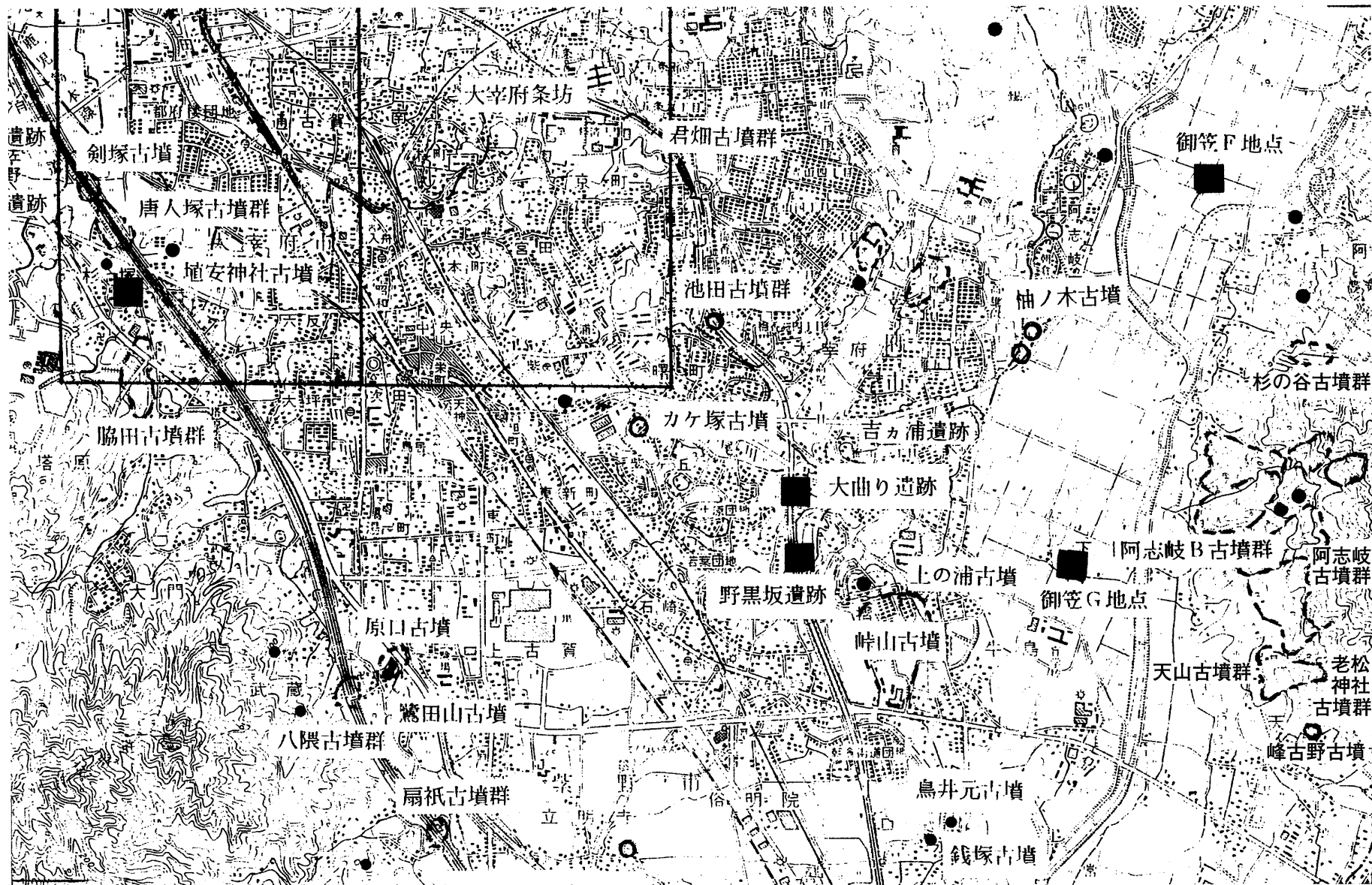


Fig.9 その他の出土遺物実測図 (S=1/3)

第1表 出土遺物一覧表

備考欄のAは色調、Bは胎土、Cは焼成、Dは残存率を示す
法量の()は推定値、復元値を示す

Fig.番号	器種	法量 口径 底径	cm 器高	手法の特徴	備考
Fig.7-1	坏蓋	12.4	2.5	かえり部内外ヨコナデ 外天井部ヘラ切後ナデ 内面ヨコナデ後ナデ ロクロ回転右	A.内・外、灰色N5/ B.1～3mm程の砂・細砂粒少量含 C.普通
Fig.7-2	坏蓋	14.4	3.1	内面ナデ 外面ヨコナデ 外天井部ケズリ ロクロ回転右	A.内・外、灰色N4/ B.0.5～1mm程の砂粒少々含 C.良好 D.3/4 内外面にガラス質の付着物
Fig.7-3	坏蓋	(12.1±e)	(2.8±e)	内外面ヨコナデ 外天井部ケズリ ロクロ回転右	A.内、暗灰色N3/ 外、暗緑灰色7.5GY4/1 B.0.5～1.5mm程の砂粒含 C.普通 D.1/2強 内外に自然釉付着 天井部外面ヘラ記号
Fig.7-4	坏蓋	13.3	3.4	内面ヨコナデ後ナデ 外面ヨコナデ 外天井部ケズリ、一部ヨコナデ ロクロ回転右	A.内・外、灰色N4/ B.1～3mm程の砂粒多く含 C.良好 天井部外面ヘラ記号
Fig.7-5	坏蓋	(15.2)	3.15	かえり部内外ともにヨコナデ 外天井部ケズリ 内面ヨコナデ後ナデ ロクロ回転右	A.内・外、暗灰色N3/ B.0.5～1.5mm程の砂粒含 C.不良
Fig.7-6	坏蓋	(13.3±e)	(2.25±e)	かえり部内外ともにヨコナデ 外天井部ケズリ後ナデ 内面ナデ ロクロ回転右	A.内、にぶい黄褐色10YR6/3 外、赤褐色2.5YR4/6～にぶい黄褐色10YR6/3 B.1～3mm程の砂粒含 C.不良
Fig.7-7	坏蓋	14.3	3.0	かえり部内外ヨコナデ、つまみ付近ヨコナデ 外天井部ケズリ 内面 ヨコナデ後ナデ ロクロ回転右	A.内、暗灰黄褐色2.5Y5/2 外、赤褐色10R5/4、淡黄色2.5Y8/4 B.1mm程の砂粒含 C.不良 D.1/2 天井部外面ヘラ記号
Fig.7-8	坏蓋	(14.7-15.9)	4.5	かえり部内外ともにヨコナデ、つまみ部ヨコナデ 外天井部ケズリ、 内天井部ヨコナデ後ナデ ロクロ回転右	A.内・外、灰色10Y6/・7.5Y4/ B.1～3mm程の砂粒含 C.普通 全体に歪み大きい
Fig.7-9	坏蓋	(15.0)	(3.0)	かえり部内外ともにヨコナデ 外天井部ケズリ、内面ヨコナデ後ナデ ロクロ回転右	A.内・外、灰白色2.5Y7/1 B.1～1.5mm程の砂粒含 C.やや不良 D.1/4
Fig.7-10	坏蓋	(18.8)	(2.5±e)	器表摩耗 調整不明	A.内・外面、明黄褐色2.5Y7/6 B.1～1.5mm程の砂粒含 C.不良 D.1/3
Fig.7-11	坏身	11.9	3.05	器表摩耗 調整不明	A.内・外、灰黄色2.5Y7/2 B.1mm程の砂粒含 C.不良 D.1/2 外底面ヘラ記号
Fig.7-12	坏身	13.3	9.0	器表摩耗 調整不明	A.内、明灰黄色2.5Y7/2、外、明灰白色2.5Y8/2 B.細砂粒わずかに含 C.不良 外底面ヘラ記号
Fig.7-13	坏身	13.1	4.4	口縁部内外ともにヨコナデ 内底面ヨコナデ後ナデ、外底面ヘラ切 後ナデ ロクロ回転右	A.内、灰色N6Y/、外、灰色N6Y/、暗青灰色5DB4/1 B.1～3mm程の砂粒少々含 C.普通 D.1/2 外面に自然釉付着 全体に歪み有る
Fig.7-14	坏身	12.4	4.0	口縁部内外ともにヨコナデ 外底面ヘラ切後ナデ、内底面ヨコナデ 後ナデ ロクロ回転左、外底面に板状圧痕	A.内・外、灰色N4/ B.1.5mm程の砂粒少々含 C.良 D.3/4
Fig.7-15	高台付坏	(13.2) 高台径 (8.6)	4.8	内面ナデ 外面ヨコナデ 外底面ヘラ切後ヨコナデ ロクロ回転右	A.内・外、暗青灰色10BG4/1 B.1～2mm程の砂粒含 C.良 D.1/2 外面自然釉付着、外底面ヘラ記号
Fig.7-16	高台付坏	15.0	7.6	口縁部ヨコナデ 内外底面ナデ ロクロ回転不明	A.内、灰色N5 外、灰色N5/一部N6/ B.2～3mm程の砂少量・細砂粒含 C.普通
Fig.7-17	高台付坏	14.05 高台径 (8.6)	4.45	内底面～外面体部ヨコナデ 外底面ヘラ切後ナデ ロクロ回転右	A.内・外、暗青灰色5B4/1 B.1～3mm程の砂粒多く含 C.良好 D.2/3 外底面ヘラ記号
Fig.7-18	高台付坏	(14.2) 高台径 (9.75)	4.9	内外面器表摩耗 外面一部ヨコナデ?	A.内・外、灰オリーブ7.5Y6/2 B.1～1.5mm程の砂粒多く含 C.不良 D.1/2
Fig.7-19	坏身	(12.0)	3.6	器表摩耗	A.内、暗褐色7.5YR3/4 外、褐灰色7.5YR5/1 B.2～5mm程の砂粒少量・細砂粒含 C.普通
Fig.7-20	高台付坏	(14.0)	(4.0±e)	体部内外ともにヨコナデ 内底面ナデ 外底面ヘラ切後ナデ ロクロ回転不明	A.内、黄灰色2.5Y5/1 外、暗灰色N3/ B.砂粒多含 C.良
Fig.7-21	高台付坏	12.5	(3.6)	体部内外ヨコナデ 内底面ナデ、外底面ヘラ切後ヨコナデ ロクロ回転不明	A.内・外、灰色7.5Y5/1 B.1～1.5mm程の砂粒含 C.普通 D.2/3 外面自然釉付着、外底面ヘラ記号
Fig.7-22	坏身	(14.2)	7.3	器表摩耗 調整不明	A.内、灰黄色2.5Y6/2 外、暗灰色N3/ C.良好
Fig.7-23	坏身	(16.0)	9.2	体部内外ヨコナデ 内外底面、器表摩耗 調整不明	A.内・外、灰白色5Y7/2 B.0.5～2.5mm程の砂粒含 C.不良 D.1/3 全体に歪み有
Fig.7-24	壺		(3.9)	内外面ヨコナデ	A.内、橙色5YR6/6 外、橙色7.5YR6/6 B.1mm程の砂粒多く含 C.普通
Fig.7-25	盤	(21.0)	(4.5)	体部内外ともにヨコナデ 内底面ヨコナデ後ナデ、外底面ヘラ切後 ケズリ ロクロ回転右	A.内・外、灰色5Y6/1 灰オリーブ6/2 B.1mm程の砂粒少々含 C.普通 D.7/8
Fig.7-26	壺	9.8 裾部径 13.7	23.5	口縁外面～内面体部ヨコナデ 外頸部～体部中位カキ目、体部下位 ケズリ後ナデ ロクロ回転不明	A.内・外、灰色5Y6/1・灰白色5Y7/2 B.1mm程の砂粒少々含 C.不良 D.ほぼ完形
Fig.7-27	高坏	(21.2) 裾部径 (11.6)	7.1	内外口縁部ヨコナデ 外面体部～底部ケズリ、内底面ナデ、脚内外 ヨコナデ ロクロ回転右	A.内・外、灰オリーブ7.5Y6/2 B.1mm程の砂粒わずかに含 C.不良
Fig.7-28	鉢	(15.7)	8.2	外面体部下位～内面体部中位ヨコナデ 内底面ナデ、外底面ケズリ 後ナデ ロクロ回転右	A.内・外、オリーブ灰5GY5/1 B.0.5～1mm程の砂粒含 C.普通 D.1/3 胴部に2ヶ所ヘラ記号
Fig.7-29	壺	頸部径 7.2	(12.35±e)	内外面ヨコナデ 中央部に二条の沈線	A.内・外、灰色N4/ B.1mm程の砂粒少々含 C.良好
Fig.7-30	甕		(20.8±e)	内面同心円のタタキ後ヨコナデとタタキ 外面平行タタキ後カキ目、格子状のタタキ	A.内・外、灰色N4/ B.0.5mm程の砂粒少々含 C.普通
Fig.8-31	甕 (土師器)	(14.0)	13.6	口縁部内外ともにヨコナデ 内面ケズリ、外体面ハケ目? 外底面ハケ目後ナデ	A.内、橙色5YR6/8 外、赤褐色2.5YR4/6・明黄褐色10YR6/6 B.0.5～1.5mm程の砂 粒及び赤褐色砂粒含 C.普通 D.1/3 外面煤付着、黒斑有
Fig.8-32	甕 (土師器)		(9.35±e)	口縁部内外ともにヨコナデ 内体面ケズリ、外体面ハケ目?	A.内・外、明赤褐色5YR5/6 B.1～2mm程の砂粒含 C.普通
Fig.8-33	甕 (土師器)		(9.95±e)	口縁部内外ともにヨコナデ 内体面ケズリ、外面ハケ目	A.内、明赤褐色5YR5/8 外、橙色7.5YR6/6 B.0.5～1.5mm程の砂粒含 C.良好 D.1/10
Fig.8-34	甕 (土師器)		(8.1±e)	口縁内面の器表摩耗 外面ハケ目後ナデ 外体面ハケ目、内体面中位ケズリ	A.内・外、橙色5YR6/8 B.1mm程の砂粒とウンモ含 C.普通
Fig.8-35	甕 (土師器)		(9.0±e)	口縁部内外ヨコナデ 内体面上位ケズリ、中位～下位ケズリ後ナデ、外体面ハケ目後ナデ	A.内・外、明赤褐色5YR5/8 B.0.5～3mm程の砂粒とウンモ含 C.普通 D.1/8
Fig.8-36	甕 (土師器)		(7.2±e)	口縁部内外ともにヨコナデ 内体面上位ハケ目後ケズリ、中位ケズリ 外体面ハケ目後ナデ	A.内・外、橙色7.5YR6/6 B.1～3mm程の砂粒を多く含 C.普通
Fig.8-37	甕 (土師器)	(17.6)	(6.9±e)	口唇部ヨコナデ 内体面ケズリ、外体面ハケ目一部摩耗	A.内、にぶい赤褐色5YR5/4 外、赤褐色5YR4/6 B.1～2mm程の砂粒、ウンモ含 C.普通 内面一部煤付着
Fig.8-38	甕 (土師器)	20.8-21.8	(16.8±e)	口縁部ヨコナデ 内体面ケズリ、外体面ハケ目	A.内、にぶい赤褐色5YR5/4 外、橙色5YR6/8 B.1～2mm程の砂粒含 C.普通 D.2/3 外面煤付着
Fig.8-39	甕? (土師器)		(8.5±e)	口縁部ヨコナデ 内体面ケズリ、外体面ハケ目後ナデ	A.内・外、明赤褐色2.5YR5/6 B.1～2mm程の砂粒多量・ウンモ含 C.普通
Fig.8-40	甕? (土師器)		(6.85±e)	口縁部ヨコナデ 内体面ケズリ、外体面ハケ目	A.内・外、橙色5YR6/4 B.0.5～1.5mm程の砂粒含 C.普通 外面煤付着
Fig.8-41	甕? (土師器)	(16.8)	(5.0±e)	口縁部内外ともにヨコナデ 内体面ケズリ後ナデ、外体面ハケ目後ナデ	A.内・外、明褐色7.5YR5/6 B.1mm程の砂粒多く含 C.普通
Fig.8-42	甕 (土師器)		(7.4±e)	口縁部内外ともにヨコナデ 内体面ケズリ、外体面ハケ目	A.内・外、黄褐色10YR5/6 B.1～2mm程の砂粒含 C.普通 外面煤付着及び黒斑有
Fig.8-43	甕 (土師器)		3.0	口唇部内外ともにヨコナデ 他は器表摩耗	A.内・外、にぶい橙色5YR6/4 B.1mm程の砂粒とウンモ・赤褐色土含 C.普通 D.1/7
Fig.9-44	坏?		7.0	内外面体部ヨコナデ 内外底部ナデ ロクロ回転不明	A.内、灰色N6/ 外、灰色N6/・暗オリーブ灰5GY4/1 B.1～1.5mm程の砂粒多く含 C.普通 D.1/4弱 自然釉付着 歪み有
Fig.9-45	甕 (土師器)	(14.2)	(6.9±e)	口縁部内外ともにヨコナデ 外体面ハケ目? 内体面ケズリ	A.内、橙色7.5YR6/6 外、橙色5YR6/6 B.0.5～1mm程の砂粒含 C.普通 内面一部煤付着
Fig.9-46	甕 (土師器)		(20.65±e)	口縁部内外ともにヨコナデ 外体面ハケ目後ナデ、内体面ケズリ 内体面下位ケズリ後ナデ	A.内、明褐色7.5YR5/8 灰褐色7.5YR4/2 外、明褐色7.5YR5/8 B.0.5～2mm程の砂 粒とカクセン石含 C.良好 外面煤付着



Ⅳ. まとめ

今回の調査では、はからずも、この地域に窯跡の存在した可能性を得ることができたが、ただ残念な事に本体のほとんどは、道路の下にあって全容を窺うことができない。

しかし検出した本体の一部もしくは土層図から考えられることを考慮しながら検討してみたい。

Ⅰ. 窯について

現地では調査区の最南部で平面形を、不整な大きな落ち込みとして検出した。検出段階と掘り上がってからの壁面の観察では、確実に被熱を受けた壁は、北東側のアミかけ部分だけであり、全体的（西側）に被熱を受けた壁は続かない。ただ掘り下げる段階では、埋土の状況に変化はなく、同様の堆積状況をみせたため同一の遺構として床面まで検出した。C～C'ラインの断面図の床面でも高低差は、殆どなくほぼ水平となっている。

南壁東側の土層図からは、⑬灰層や⑭茶褐色粘質土の堆積がここから始まっていることが理解される。またこれらの層の上には、⑪被熱した壁もしくは天井部と考えられる埋土が、ほかより厚く熱変化した地山を挟んでさらに堆積している。この層序からは、東側が窯の東壁部にあたることを推測できる。

北側の壁面を煙道部分とし、前述の箇所を東壁部として窯本体の位置を推定すると窯本体は斜面（等高線）に直交するように本体が所在していたことが窺える。

東側を窯本体の壁部分として仮定すると西側に壁面の立ち上がりをみいだして当然といえるが、西側部分には壁面の立ち上がりらしいものを確認することは、層序からはできなかった。

これらを本体の一部であるとする東側を基点にして横幅6mを超える巨大な広さの本体構造となってしまう、周辺の調査事例（特に牛頸窯跡群）にもありえない結果となり、規模を考えても突飛な数値で、想定できない大きさとなる。

南壁土層図からは西側の壁の立ち上がりは確認できないが、変化点をさらに検討すると検出した最南部の基底面が、東から1.5m付近を中心として僅かに窪むことが理解できる。また基底面上の堆積すなわち⑭と同様に⑬の灰層の堆積も僅かに中心が窪む変化を見せて、これより0.8mのところでレベルは、僅かに高くなり傾斜の変化をみせる。もしかすると⑬や⑭もこの付近で層序に僅かな変化があったのかもしれない。基底面まで検出する際の埋土に変化を捉えることができなかったため、層序の変化を見逃した可能性は否定できない。（但し、この場所以外は⑬灰層や⑭茶褐色粘質土はほとんど水平に近い状態で堆積していることを示している。）また、西壁で作成した土層図からは、⑬灰層や⑭茶褐色粘質土は堆積の厚みも南壁より薄くなっていき終息に近づくことが読み取れる。

さらには⑪の層序を検討すると東側から1.8m付近で一度この層序は分断され、そして西側へと続いて行く。横断面のA～A'ラインの床面は、壁側から平坦面がなく、斜めに未調査区の方へ下がっていく形状で、またB～B'ラインの床面は、一旦平坦面を呈すが傾斜変化点があって、それから緩やかに弧を描きながら未調査区へと続いていく。このように傾斜の違いなど床面の構造に違いをみせる。また床面の還元状態は、総体的に被熱の度合いは少ないといえるが、AないしBラインを比較すると僅かにBラインのほうが強く、検出時の観察から床面上の吸炭は、Aラインから西側のほうがより強いのこっていた。これらの状況の違いは、遺構の重複を示していることに起因するか

も知れない。

これらのことを考慮すると窯と思われる遺構は、単独の構築ではなく複数（但し2～3基）が存在していた可能性をも否定できない。

さらには現状の遺存した壁からも窯の改修された痕跡は、確認できないことから操業は短期間であったことが窺えるとともに稚拙な窯であった可能性もある。

野黒坂遺跡と大曲り遺跡に挟まれた小谷は、開墾によってほとんど埋められているが、窯跡の所在していた可能性は否定できない。

Ⅱ. 出土遺物について

出土の位置は、東側と西側に大きく分かれるが、中間の位置から出土したものも少しはある。

遺物の出土した層位は、⑬灰層や⑭茶褐色粘質土からが主となる。

遺物は、須恵器が多いが多少の土師器も混在している。須恵器には、かなり歪んだ製品や焼成が不良なものが含まれている。

時期的には、7世紀後半を主体として8世紀前半代までに比定できるもので、出土状況及び遺物からは、複数の窯が存在しても操業の時期差は、殆どないものと考えられる。

Ⅲ. 周辺の生産遺跡と大曲り遺跡の関連について

春日市や太宰府市の一部を含んだ大野城市に所在する牛頸窯跡群には、当然のごとく同時期に操業された窯は存在しているが、牛頸窯跡群に属さない所にも窯跡が存在した事例もある。

大曲り遺跡を含めた周辺域の土器生産を含めた他の生産遺跡を概観し、大曲り遺跡周辺域における生産体制を考えてみたい。

大曲り遺跡の北北西1.8kmには、3基の炭焼窯を検出した池田遺跡、北西1.7kmには峰畑遺跡の小規模の炭焼窯と鍛冶遺跡が、また北東0.8kmには小規模な炭焼窯を検出した高雄遺跡が存在する。

これらの遺跡は古墳時代では、池田遺跡に古墳群が、大曲り遺跡には古墳時代の集落が営まれていた所でもある。

また奈良・平安期にはこれらは、郭内と郭外に位置づけられるが、これら遺跡の立地する丘陵部は、郭内・郭外の違いはあっても、郭内中心部には比較的近い距離にある。

またそれぞれは地形的には山間のやや人里から離れた場所でもあり、生産に必要な原材料（薪）などが入手しやすい場所であったことは、共通点としてあげられる。

これらの遺跡が、近距離に立地することも考えると大曲り遺跡と周辺の鉄生産遺跡は、広義に一つの生産遺跡群として把握でき、同一の経営主体により統括されていた可能性は、当然考えられる。

大曲り遺跡周辺に近接する宮地岳山麓や二日市中央地域に古墳時代後期には多くの群集墳がつくられ、副葬品として扱われる鉄製品も急増し、そのための鉄器生産活動は、かなり普及していたことが想定される。

このことから、あるいは大曲り遺跡周辺に鉄生産ならびに窯業にかかわる工人の集落が存在していたことも想定され、これら工人集団が律令体制に組み入れられる直前まで、小規模ながらこの周辺域で生産活動を展開していたと考えておきたい。

報告書抄録

ふりがな		おおまがりいせきⅡ						
書名		大曲り遺跡Ⅱ						
副書名								
巻次		第49集						
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名		渡邊 和子						
編集機関		筑紫野市教育委員会						
所在地		〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1番1号 TEL 092-923-1111(代)						
発行年月日		西暦2001年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおまがり 大曲り	福岡県筑紫野市 大字針摺	筑紫野市	170102	33° 29' 18.373"	130° 32' 21.889"	平成7.6.16) 平成7.7.1	405m ²	分譲住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
大曲り	集落	古墳時代) 奈良時代	窯状遺構 土坑 柱穴 住居跡		須恵器 蓋 環 高環 盤 土師器 甕			

おおまが 大曲り遺跡

筑紫野市文化財調査報告書

第49集

発行 筑紫野市教育委員会

福岡県筑紫野市二日市西1丁目1番1号

印刷 株式会社 海援社

福岡市博多区光丘町1-3-5